

妻を在宅でカイゴして (第4回)

15年にわたり妻を介護している北海道・野瀬義昭さんの介護体験。排泄処理の苦労は並大抵のものではなく、泣きたくなるような毎日。重労働の在宅介護に、体力がうばわれストレスがつのります。



イラスト・井上ひいろ

介護とは「食事と排泄、入浴」とよく言われている。

はじめのころ、排泄は車椅子に乗せて、トイレまで連れて行き、便器に座らせていた。しかし、和子の身体機能の低下がすすみ、それができなくなつたので、ベッドの横にポータブルトイレを置くことにした。

手間と時間と労力と

寝返りもできないからだだから、大変な苦労だ。下着をぬがせ、寝たきりのぐにやぐにやの体を抱きかかえて、ポータブルトイレに座らせる。ポータブルトイレにたどりつく途中で漏らし

てしまうこともあった。用を足し終わるまで支えていなければ倒れてしまうので、処理を終えるまでには多くの手間と時間と労力がかかる。

わたしは腰痛とひじ痛、肩痛に悩まされはじめた。さらに力を入れるときに歯を食いしばるため、下の奥歯が五本も割れてしまった。歯科医師からは「重労働者によくおこることだよ」と言われた。「わたしは重労働者か」、ひとりつぶやいた。

人生のはかなさ、しみじみと

このままでは、介護者のわたしが倒れてしまう。訪問に来てくれる看護師は紙おむつをすすめ、わたしはそれをうけいれた。

紙おむつをはいてみた。なんとも違和感がある。わたしにもこんなときがくるのかとおもうと、人生のはかなさをしみじみと感じた。「人間の一生は、おむつで始まり、おむつで終わる」との言葉をおもいだす。和子に「すまない」とあやまる。和子は、かすかな笑顔をにつくり、こくんとうなずいた。

紙おむつにしたからといって、介護が楽になったわけではない。二時間おきの体位交換に、おむつ交換がかわわる。最初は要領もわるく、後始末が大変で悲惨なものだった。正直泣きそう

ほんと介護

111

になった。量も多く、大人のそれは半端ではない。ゴム手袋をしていたが、いつしか素手になり、便が爪の間にめり込んだ。「よごれたら、洗えばいいさ」と、平気になってしまった。

陰部の洗浄には細心の注意を払う。それでも、大腸菌による膀胱炎を幾度も誘発した。排泄は腹筋が弱いの一度に出しきれない。一日に五度、六度になることも。厳寒期の深夜、疲れでよれよれになっているときなどは感情を抑えきれず、「またか」と口走ることもある。「ごめんね」というような悲しそうな和子の目は、わたしの心をしめつける。

生きぬくためには…

ある男性介護者の手記に「妻が生前床に伏したときに、おむつの世話は、夫にはしてもらいたくない」と常に話していた」と書いていた。

生きぬくために欠かせない排泄の始末を、自分でできない和子こそつらいのだ。しかし、そこまでおもいが及ばないほど、わたしはストレスがたまりにたまっていた。

(つづく)